Top Interview

トップに聞く！

福岡銀行

「ダイヤ糊」が生まれて75年。その技術力、開発力をもってニーズに応える新製品を生み続ける。

ダイヤ糊工業（のりこうぎょう） 株式会社
代表取締役社長
高山（たかやま） 卓己（たくみ） 氏

ダイアックス 株式会社
代表取締役社長
高山（たかやま） 泰輔（たいすけ） 氏

取引店／福岡銀行 八女支店

■会社概要

【ダイヤ糊工業株式会社】
設立:1949年／**所在地:**福岡県八女市／**資本金:**3,000万円／**従業員:**20名／**事業内容:**接着剤、保冷剤、保温剤、玩具、バイオ製品の開発・製造

【ダイアックス株式会社】
設立:1990年／**所在地:**福岡県八女市／**資本金:**2,000万円／**従業員:**5名／**事業内容:**接着剤、保冷剤、保温剤、玩具、バイオ商品の販売

会社ホームページはこちらからどうぞ!

本社正門前（左から高山泰輔社長、高山卓己社長、五島頭取）

75年続くロングセラー どこの家庭にもあった パリッと仕上がる「ダイヤ糊」

洗濯糊（のり）、障子やふすま張り用の糊として親しまれてきた「ダイヤ糊」。中高年以上の方であれば、昔どこのご家庭にもあったのではないでしょうか。当社はこの「ダイヤ糊」をはじめとする糊関連製品を、75年にわたって製造してきました。

創業したのは私（高山卓己社長）の父である、先代社長の高山正男（まさお）です。先代は当時主流であった「ふのり」に代わる糊ができないものかと考え、ここ八女で、製紙会社用糊および事務用糊の製造を目的に「旭工業」を創業します。当時はでんぷんの確保が難しく、彼岸花の球根を原料にしてみるなど、様々な原料を試していました。

ビニール袋に詰めて販売した「ダイヤ糊」がヒット！

そのような紆余曲折の中、1949年に小麦のでんぷんを原料にした新しいでんぷん糊の開発に成功します。それが今も続く「ダイヤ糊」です。それまで糊の包装は瓶詰めが一般的でしたが、当社では日本で初めて、ビニール袋に詰めて販売。これにより輸送がしやすくなり、九州一円に販売網が広がっていきました。

今でこそ、洗濯糊を使用するご家庭は少なくなったものの、そのパリッとした仕上がりの良さから今なおロングセラーを続けている製品です。

一方、1964年からは関連製品の開発を目指し、強い接着力と柔軟性などに優れた合成樹脂接着剤「酢酸ビニルエマルジョン」の製造を開始しています。この製造によって、洗濯糊だけでなく家具や段ボール、壁紙などの内装の接着剤としての市場開拓に成功しました。

1990年には販売部門を独立させ、「ダイアックス株式会社」を設立します。これは糊以外の製品が増えてきたために、「糊」のイメージが強い社名では販売しづらいといった事情があってのことでした。現在は、私の息子の泰輔が社長を務めており、国内ではホームセンターを中心に展開し、海外にも販売網を広げています。

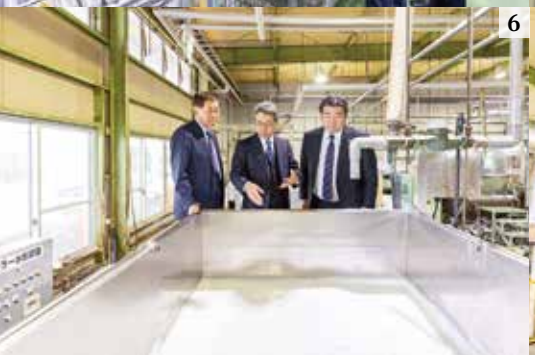
家庭でのニーズが減少 顧客が求めるものを作り続ける

ビニール袋での販売が開始した1949年に法人化し、社名も「ダイヤ糊工業株式会社」と

5

3

1


6

4

2

改めました。

しかし、時代は常に変化します。家庭の洗濯で糊付けをする習慣がなくなり、安価な製品も進出してきました。そのような流れはどの製品であっても逃れることはできません。10年ほどのサイクルでニーズが変わることを念頭に入れ、常に新しい製品の開発に挑戦し続けてきました。

ダイヤ糊工業株式会社 高山卓己社長

ダイアックス株式会社 高山泰輔社長

接着剤の用途としては現在、紙器用、製袋用、障子・ふすま・壁紙用、トイレットペーパー用、提灯や打ち上げ花火用、段ボール用、卒業アルバム用など多岐にわたっています。常に顧客のニーズに応じた製品を作り続けると同時に、糊の技術を元に新しい製品の開発にも着手。保冷剤、防カビ剤・消臭剤といったバイオ製品、子ども向けの玩具なども開発しています。

保冷剤やバイオ製品、玩具も続々 その根底にあるのは良い製品を作り続けること

当社の社訓の最初に、「吾々は、偽りと過ちのない良い製品で、社会に奉仕し貢献する」を掲げています。この言葉通り、当社では良い製品を作ることを第一に開発してきました。

例えば、バイオ製品である「なっとう君」シリーズは、天然素材のカビ取り、消臭剤です。この製品は、納豆菌の仲間である納豆菌類緑菌という微生物の持つ力を利用した防カビ製品で、福岡県工業技術センター生物食品研究所と協力して開発しました。安全性が高く、人に優しい製品として高い評価をいただいています。

保冷剤も今や様々なメーカーが製造していま

11

9

7

10

8

1.対談風景／2.3.工場内を見学／4.自社商品の説明／5.工場内のロボット化も進めている／6.糊の製造工程の説明／7.昔から親しまれてきた糊商品／8.保冷能力が高い保冷剤／9.納豆菌類緑菌でカビ防止・消臭効果がある「なっとう君」／10.子ども向けに開発された玩具／11.企業メッセージ

最前列左3人目からダイアックス株式会社成田課長、高山泰輔社長、高山卓己社長、五島頭取、武藤支店長（福岡銀行）

すが、当社の保冷剤「クールタッチ」は、保冷能力が高く、長時間10℃以下の状態に保つことが実証されています。当社独自の技術やノウハウが蓄積されてきたからこそ、このような信頼される高い品質の製品を生み出すことができたのです。

玩具については、合成樹脂であるPVA（ポリビニルアルコール）を使った「PVAのり」の特性を活かしたバルーンスライムなど、知的かつ子どもたちの感性が豊かになる製品開発を行っています。「PVAのり」はホウ砂（しゃ）（四ホウ酸ナトリウム）などを混ぜることで「ふうせんねん土」となり、子どもたちが自分たちで作ったり、膨らませて遊んだり、想像力を掻き立てる玩具としても愛されています。

25歳で突然の社長就任 良い人間関係に支えられて

私が社長に就任したのは25歳の時でした。先代の父が急逝し、東京支社の立ち上げで福岡を離れていた私は急遽、本社に戻りました。突然のことで、何も父から教わっていなかった中、私を支えてくれたのは従業員、そして取引先や地元の皆様でした。良い製品作りとともに、良い

人間関係を築いてきたことが、今日につながっていると実感しています。

しかし、当社も昨今は人材不足が続いています。それらを補うためにロボットなどの最新機械を導入し省力化も進めていますが、やはり「人」が重要です。私たちの品質を守る技術を習得するには、実は10年ほどの年月がかかります。

現在の社員の平均年齢は30代と意外に若くなっています。これはダイヤ糊工業が創業75年、ダイアックスが創業34年とちょうど従来の社員と若手の移り変わる時期に当たり、新しい発想と力が必要な時期に差し掛かっていることを示していると思います。

そんな中で、私たちの製品を知り「ぜひ働きたい」とわざわざ連絡をくれて、現在は、品質管理部門の大きな力になってくれている若い人材もいます。良い製品を作ることは、人材獲得にもつながることを実感しました。

ニーズが多様化する時代 可能性をさらに広げていく

現在の本社社屋・工場は、2001年に完成しました。かなりの敷地があるので、今は元々本社があった第二工場や倉庫を全部こちらに集約しようと計画しています。

昨今はホームセンターの台頭で、消費者ニーズが多様化し、製品の差別化・利便性の追求、価格の選択など様々な課題に対応する必要に迫られています。特に今一番注目されているSDGs（持続可能な開発目標）の観点から考えて、合成樹脂接着剤よりも体に優しいでんぷん系接着剤の良さが見直されてくるのではないかと考えています。

新しい分野では、糊の粘着性に着目し、除草剤や殺虫剤の分野でも注目されています。接着剤は宇宙ロケットにも使われていますので、可能性はまだ無限大にあると思っています。顧客のニーズに応える技術力で、更なる新しい製品の開発に力を入れてまいります。

いずれは息子の泰輔にすべての事業を継いでもらう予定です。10年、20年後を見据えてお客様や市場のニーズの変化を捉えながら、ものづくりの会社として時代に合った製品の開発や経営を継続していき、様々な変化を加えながら100周年を迎えることを期待しています。

■ インタビューを終えて

福岡銀行　取締役頭取　**五島 久**

ビニール袋に入った「ダイヤ糊」、馴染み深い方も多いと思います。当社は、祖業であるでんぷん糊製造技術を、接着剤、保冷剤、バイオ製品、玩具開発など幅広い分野に展開してこられました。

でんぷん糊は天然素材で作られており、環境にも身体にも優しい製品です。SDGsの観点からも、当社がこれまで培ってきた技術が改めて評価されており、そうした社会の要請はこれから更に高まるものと思います。

当社は今年、創業75年。製品開発への強いこだわりと柔軟な発想力を原動力に、100年企業への道のりを着実に歩んでおられます。

Top Interview

トップに聞く！

熊本銀行

豪雨災害を乗り越え新工場で再起。海外ハラル認証を強みとしてグローバル展開へ。

ゼンカイミート 株式会社

代表取締役社長
南村（なむら） 輝夫（てるお） 氏

取引店／熊本銀行 人吉支店

■会社概要

設立:1989年／**所在地**:熊本県球磨郡錦町／**資本金**:2億5,100万円／**従業員**:62名／**事業内容**:牛のと畜解体処理、食肉加工処理および販売

会社ホームページはこちらからどうぞ!

2023年9月に竣工した本社工場前（左から南村社長、野村頭取）

BSEという大きな試練に積極的な挑戦で立ち向かう

当社は1989年、全国開拓農業協同組合連合会（通称：全開連）を始めとする開拓農協系統によって設立された牛を専門とする食肉処理加工業者です。ゼンカイミートという社名も「全開連」に由来しています。

当社でと畜および加工を手がけている牛は、天然ハーブとビタミンEを強化した配合飼料で育てた「ハーブ牛」や「ハーブ交雑種」、開拓地で育まれた「開拓牛」など、地元九州産の国産牛です。付加価値の高い牛肉であり、それらを工場直売とネット通販というチャネルを使って手頃な価格で提供。と畜から出荷・販売までを一貫して行う体制を整えています。

そもそも九州は「畜産王国」といわれるほど畜産が盛んであり、北海道が酪農の盛んとなった歴史を有するのに対して、九州は肉用牛の生産で知られています。

当社は設立以来、生産者が安全・安心な飼料を用い、薬や抗生物質などを極力与えなくとも健康に育つ環境を整備しながら丹念に育てあげた肉牛を、責任をもって食肉加工処理する役割を担ってきました。

そのため、1997年に病原性大腸菌O-157汚染防止対策となると畜場施設を設けて、操業を行ってきましたが、最大の試練となったのが2001年に起きたBSE（牛海綿状脳症：いわゆる狂牛病）の問題でした。牛肉の需要が急落して厳しい経営状況に追い込まれましたが、「ピンチはチャンス」という言葉があるように、新たな挑戦に乗り出すことで苦境を乗り越えてきました。具体的には、ホルモン等の商品の仲卸を相手とする販売から消費者に対する直接販売への切り替え、加工品の開発・販売開始、牛肉や内臓類を新鮮なまま保存できる急速冷凍システムの導入などの施策です。

牛専門のと畜・加工施設がもたらした新たな方向性

その後も、2007年にインターネット通販を開始し、工場直売所をリニューアルするなどの取り組みで、事業の特色を打ち出してきました。2012年には、食品衛生優良施設として表彰されています。また、「生産者の顔が見える商品供給」を実現するため、トレーサ

ビリティシステム（個体識別番号で識別・管理し、生産者や産地が消費者にもわかる仕組み）も構築しています。

なかでも、当社の方向性を探るうえでもっとも重要な岐路となったのが、2012年のインドネシアの認証機関からの「ハラル認証」取得で、日本では初めての事例となりました。「ハラル」とはイスラム教の戒律で「許されたもの」を意味します。ハラル食品を販売するには、その原材料や製造工程（と畜方法や設備も含む）などの審査を受けて、イスラム教では禁じられている豚肉やアルコール類を使用していないことを認証してもらう必要があります。

当社の工場は、もともと牛肉のみをと畜、加工する施設であるのに対し、国内のと畜・加工施設は豚肉も手がけるところが多いため、ハラル認証を取得するのが難しいのです。当時、牛肉の輸出先として注目されていたのは米国や中国でしたが、親日家の多いASEAN諸国にも日本の牛肉に対するニーズがあります。さらにいえば、ASEAN諸国に多くに存在するイスラム教徒の食品マーケットは大きな成長が見込めますし、ハラル食品は日本国内でも一定の需要があります。

南村社長

将来的な国内市場の縮小を見越しての挑戦は、日本で過去に例がないだけに当初は手探り状態での取り組みが続きましたが、世界最大のイスラム国家であるインドネシアの認証機関からのハラル認証取得は、海外へ向けた輸出の道を拓く足がかりとなりました。

さらに2017年、当社はマレーシア政府よりハラル処理施設として承認され、日本政府よりマレーシア向け輸出施設として公表されました。翌18年には、UAE・カタール・バーレーン向けの輸出施設としても公表されることに。イスラム圏へ向けた海外展開の土台が着々と構築されていきました。

まず国内在住および訪日したイスラム教徒向けに牛肉を販売するようになったのは、牛肉のみを扱う施設がもたらしたメリットといえます。

11

9

7

10

8

1.対談風景／2.応接室から見える加工場の見学／3.と畜工程の説明／4.令和2年7月豪雨当時の写真の説明／5.礼拝室を見学／6.礼拝堂の入り口には身を清めるスペースがある／7.新工場の前を散策／8.解体を行うクリーンゾーン／9.新工場の全景／10.ECサイトで販売されているハーブ牛／11.企業メッセージ

前列左から下田部長、犬童工場長、南村社長、野村頭取、米田支店長（熊本銀行）

新工場で気持ちも新たに 海外展開を目指す

そんな矢先、またもや大きな試練が当社を襲いました。令和2年（2020年）7月豪雨によって工場および直売所が被災し、生産者が思いを込めて育てた安全で安心、こだわりのおいしい牛肉を提供できなくなりました。

工場が稼働できなかった間もなんとか従業員の雇用を守りながら、同じ錦町の木上に新工場の建設を進められたのは、当社関連組織の協力や地域の方々のご支援のおかげです。熊本銀行さんにも、再稼働までの資金繰りの面で大変お世話になりました。

その結果、2023年8月に新工場が完成。試運転を経て、10月の再稼働にこぎつけることができました。新社長となった私を含め、新たに従業員となった人たち、以前から社業に従事していた人にとっても、新工場での業務は新しい試みとなりました。

新工場の設計では、旧工場の難点を解決すべく、動線や作業効率を見直し、働きやすい職場環境の実現に努めました。また、再出発を機に、従業員の衛生面、労働安全面、品質管理面での再教育に力を入れ、技術継承と技能

向上を促す意欲の醸成にも取り組みました。さらには、ハラル認証取得に際してイスラム教徒の従業員を雇用し、彼らのために専用の礼拝室を新設しました。

当社では、２００４年に「ＩＳＯ９００１（品質マネジメントに関する国際規格）」と「ＨＡＣＣＰ（衛生管理手法の規格）」の認証を取得していますが、海外への輸出には、さらに上位の規格である「ＩＳＯ２２０００」の取得が必要になります。取得には3か月以上の稼働実績が条件となるため、新工場がその条件を満たした後、二度の審査を経て、認証取得を目指さねばなりません。今春に認証を得て、海外への輸出を開始できるよう、歩みを進めていきます。

生産農家の未来と地域の未来
双方を担いつつ
インバウンド促進も視野に

当社の事業活動には、肉用牛の生産農家の生活を守り、その未来を担う側面があります。また同時に、人吉・球磨地区に暮らす人々に働く場を提供する意味で、地域の未来を担う側面もあります。当社には親子、夫婦の関係でともに働いている人たちがいます。先に働いていた人が当社の働きやすさを家族に伝えて、家族も働くようになりました。そういった意味では、これからも従業員の子、孫の代にも働きたいと思ってもらえるような会社を目指していきたいと思います。

さらには、地域活性化への貢献も、私たちは使命の一つと捉えています。旧工場では地元小学生の工場見学を受け入れていましたが、新工場では作業場の見学コースを設置しています。また、豪雨災害前に敷地内に整備していたバーベキュー施設を復活させ、地元の方々に開放できたらと考えています。将来的には、近隣の企業や施設などと連携して、修学旅行などを誘致できるような取り組みにまで発展させられればと考えています。

そして、当社にはハラル認証に際して獲得したイスラム教文化に対する知見があります。ハラル牛肉と飲食店、ホテル、旅館、観光施設、鉄道などを結びつけながらインバウンド需要を開拓する要の役割を担って、地域活性化のモデルケースを生み出せたら、当社の存在意義をより確かで揺るぎないものにできるでしょう。

■ インタビューを終えて

熊本銀行　取締役頭取　**野村 俊巳**

全開連傘下の食肉処理加工場として設立された後、ISO9001、HACCPおよびハラルの認証取得工場となり、安全でおいしい牛肉の市場供給を通じて実績を積んだ結果、食品衛生優良施設に認定され、「がんばる中小企業300社」に選出されるなど、企業として多くの信頼を獲得してこられました。

更に、日本で初めて、海外の認証機関によるハラル認証を取得されたことで、人吉・球磨から海外市場へと進出するグローバル展開が期待されています。新工場稼働を機に一層の躍進を果たされますよう願っています。

Top Interview

トップに聞く！

十八親和銀行

国内屈指の真珠産地である対馬でトップクラスの生産量と品質を誇る。

平井真珠（ひらいしんじゅ） 株式会社

会長
平井（ひらい） 善正（よしまさ） 氏

代表取締役社長
平井（ひらい） 正史（まさし） 氏

取引店／十八親和銀行 豊玉支店

■会社概要

創業:1964年／**設立:**2009年／**所在地:**長崎県対馬市／**資本金:**200万円／**従業員:**30名／**事業内容:**真珠養殖業

養殖場を対岸に臨む（左から平井善正会長、平井正史社長、山川頭取）

真珠養殖に適していた対馬の自然環境

一般的にはあまり知られていないかもしれませんが、対馬の真珠養殖には歴史があります。今からおよそ100年前の大正時代に、三重県の事業者が進出して真珠養殖に着手したのが始まりです。もともと天然のアコヤ貝が生息する対馬は、いくつもの小さな島と複雑な地形の入江をもつリアス式海岸から成る独特な地形で、海面の波の穏やかさが良質な真珠を生産するのに適しています。九州本土から100㎞以上隔たっているため、生活排水などで海が汚れていないことなども、真珠生産に好都合な環境とされています。

近年、長崎県の真珠生産量は三重県、愛媛県と並び日本のトップクラスを誇りますが、その長崎の中でも対馬の2年物真珠の品質は、愛媛県の宇和島と並び非常に高い評価を受けています。また、生産額においても日本屈指の規模に成長し、対馬における主要産業の一つに数えられるようになっています。

1964年、私の父で現会長(当社の初代社長)である平井善正が、対馬で伝統的に行われるようになった真珠養殖を自らの生業として始めたのが当社の始まりです。

しかし、その後のオイルショックによる世界経済の混乱、バブル経済の崩壊、さらには安価な中国真珠の台頭など、我が国の真珠業界は受難の時を過ごします。ピーク時には70社以上あった当地域の真珠養殖事業者は、その数を減らしていきました。

苦境を乗り越えさせたのは絶対に諦めない気持ち

苦難の真珠養殖から当社が撤退せずに、たび重なる危機的状況を何とか脱しながらここまでやってこられたのは、初代社長の諦めない気持ちによるところが大きかったと思います。

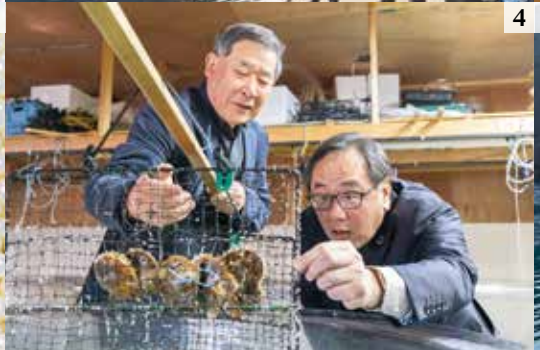
真珠養殖を始めた頃は、他社の養殖業の手伝いから始めたため、肝心なところは何一つ教えてもらえなかったそうです。見学を申し込んで出かけた他地域の事業者の現場でも、独自の技術をもらさないために手元の動きを隠されるといった目に遭っていたようです。それでも、相手の身体のわずかな動きからコツを掴み取って自分のものにしていきました。

真珠養殖の場合、真珠の母貝(ぼがい)となるアコヤ貝は、昔は海で採取したものをそのまま用いてきましたが、近代養殖では稚貝の段階から人の

1

2

3


4

5

6

手で育てる「人工採苗（さいびょう）」という技術が用いられるようになっています。専門的知識と技術を要するところから同業者のなかでも、人工採苗を行う事業者は限られています。

会長平井善正は、早く安定的に真珠を生産できる人工採苗に当地域でもいち早く目を付け、その導入に挑みました。専門的な知識の習得のために、三重県の水産試験場が作成したレポートを丸暗記するほど読み込んで頭に入れたそうです。

稚貝管理などに関する技術に優れ、全国真珠品評会での入賞など、業界での信頼を獲得してきた当社の実績は、自らの仕事に誇りを抱きつつ、相次ぐ困難に果敢に立ち向かってきた姿勢から生まれたものといってよいでしょう。

平井善正会長

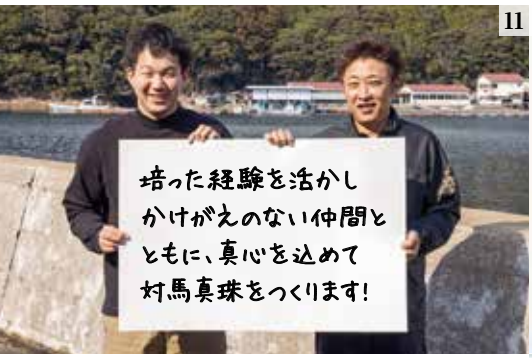
平井正史社長

「自分さえよければ」では待ち望む未来はやってこない

当社が真珠養殖事業を始めた当時の業界には、自身の技術が盗まれるのを恐れて他業者からの問いかけに答えることはせず「自分のところさえよければ、それでよい」と考える風潮がそこかしこにありました。なかには、他の生産地が台風に見舞われたことを喜ぶような事業者もいたようです。

しかし、自然環境やあらゆる外的要因と戦っていかなければならない真珠養殖事業者が、足の引っ張り合いをしている時代は、とうに終わっています。むしろこれからは、事業者同士が積極的に力を合わせ、技術を分かち合い情報を共有しながら、世界に向けて「日本の真珠」というブランドの発信力を確かなものにしていかなくてはならない状況にあると思います。

対馬では31年前の1993年に、対馬真珠養殖漁業協同組合に青年部が開設され、頻繁に



1.対談風景／2.美しいリアス式海岸内の養殖場／3.養殖場前にて／4.採苗貝を間近に見る／5.養殖に欠かせないプランクトンの培養／6.当社の2年物一級品真珠／7.プランクトンを顕微鏡で確認／8.雑菌処理を行う採苗貝／9.真珠を手に取り、奥深い輝きを実感／10.ミネラルが豊富な透き通る対馬の海／11.企業メッセージ

平井家邸前にて。左から平井敬斗（けいと）氏（社長子息）、平井正史社長、平井善正会長、山川頭取、立花支店長（十八親和銀行）

私たちを苦しめるアコヤ貝の大量死を招く原因を探るべく、関係機関と連携して疫学調査や感染実験を始めました。また、貝の生存率と品質および生産性の向上を高める取組みにも乗り出し、成果をあげてきました。

現在、当社は10社程度の仲間とともにひとつのグループを作っていますが、どの事業者とも緊密な連携を保ちつつ、常に情報交換をしながら真珠養殖を進めています。何かあれば集まり、時には会食しながら、他愛ない世間話のように自然に気兼ねなく仕事の話をする。また、それを楽しむ。そうした交流の時間が各自の成長を促すと同時に、地域の真珠養殖業を盛り立てていこうとする連帯感の醸成にもつながっているのかもしれません。

もちろん他県の同業者たちとも、業界全体の成長を目指して、積極的に情報交換を行いながらお互いを高め合っています。

大手事業者に比較して スピーディな決断が強み

当社と同規模の真珠養殖事業者では、人工採苗を行っているところは少ないのが現状です。当社が難度の高い手法を取り入れることができ

ているのは、長い事業歴とともに地道に培った養殖技術を有しているからだと自負しています。

さらに、当社の強みとして挙げられるのが、次の戦略を立てるうえでの決断がスピーディである点です。身の丈に合った養殖規模とコンパクトなグループ形成によって、事業活動のすべてに私の目が行き届くため、予測を立てながら次の展開への準備を同時に行うことができるのです。組織が大きい大手企業だと中々簡単にはいかないのではないでしょうか。現場ごとに部署が分かれているため、経営陣による情報の吸い上げに時間がかかるからです。

私たちが手がけている真珠養殖の場合、稚貝の育成から、いわゆる収穫まで数年の月日を要します。ですので、真珠の収穫を終えた段階でようやく次のあれこれを考え始めるようでは事業として成り立たない面があるのです。迅速で的確な経験判断ができる背景には、小回りのきく組織はもとより、積み重ねた経験値、情報収集力が必要だと考えています。

対馬の魅力を発信しながら地域活性化へ

対馬の主要産業の一つに数えられる真珠養殖を手がけている以上、今後も次世代へ技術を継承しながら伝統産業を遺していかなければなりません。しかしながら、少子高齢化がますます深刻化する日本では業界の将来を担う人材を探すのが容易ではないのも事実です。特に当地域のような離島ではなおさらです。当社では、働きやすい職場づくり、給与水準や福利厚生面の改善に注力してきましたし、これからも取組みを続けていくつもりです。

また、島内の事業者のなかには、外国人労働者を雇い入れ始めた事業者もあり、当社でもそのような選択肢を検討しているところです。

一方で、対馬という島には住民や事業者が支え合ってきた歴史と風土があります。たとえば、長年お世話になっている十八親和銀行さんには苦しい時に支えていただきましたが、その際には、単なる金融機関としての活動を超えて、「地場産業を育てたい」「地域に密着しながら盛り立てていきたい」という意気込みさえ感じられました。

同じように私たちにも、質の高い真珠という地元の魅力を発信することで対馬に貢献したい思いがあります。同業者だけでなく、さまざまな組織と手を携えながら、地域の活性化にも力を尽くしていきます。

■ インタビューを終えて

十八親和銀行　取締役頭取　**山川 信彦**

約100年の歴史をもつ対馬の真珠養殖。現在では、島の主要産業の一つとなり、「対馬真珠」の名は広く知られるようになっています。なかでも、当社の平井会長は全国真珠連合会の会長を3期務めておられ、社長もまた、島内同業者のリーダー的存在として業界の振興のために尽力されています。

このたびのインタビューでは、これからの真珠養殖、さらには対馬全体の発展についての熱い思いを改めて強く感じました。たゆまぬ努力と技術に裏付けられた素晴らしい対馬真珠。これからもきっと唯一無二の輝きを放ち続けるに違いないでしょう。